

カナダ研究年報

The Annual Review of Canadian Studies
La revue annuelle d'études canadiennes

第 40 号

2 0 2 0

日本カナダ学会

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes

目 次

<論文>

- 20 世紀前半のカナダ平原諸州における沖縄県出身者の移住過程
..... 花 木 宏 直 1
- 19 世紀後半オンタリオ州立「精神遅滞」者施設の役割と実際
ー同州報告書の分析ー 下 司 優 里 18

<書評>

- 田林 明 編著『カナダにおける都市ー農村共生システム
ー農村空間の商品化と地域振興ー』（農林統計出版、2020 年）
..... 藤 田 直 晴 36
- ルース・アビィ 著、梅川佳子 訳『チャールズ・テイラーの思想』
（名古屋大学出版会、2019 年）..... 丹 羽 卓 41
- 長谷川瑞穂『先住・少数民族の言語保持と教育
ーカナダ・イヌイットの現実と未来』（明石書店、2019 年）..... 岸 上 伸 啓 46
- 和泉真澄『日系カナダ人の移動と運動ー知られざる
日本人の越境生活史ー』（小鳥遊書房、2020 年）..... 下 村 雄 紀 51
- 水戸考道・大石太郎・大岡栄美 編著『総合研究 カナダ』
（関西学院大学出版会、2020 年）..... 田 中 俊 弘 56
- ### <文献リスト>
- 日本におけるカナダ研究・カナダ関連の近著 61

和泉真澄『日系カナダ人の移動と運動 —知られざる日本人の越境生活史—』 (小鳥遊書房、2020年)

下村 雄紀

カナダ研究はその性質上、政治学、歴史学、社会学、地理学、法学、教育学、文学、文化人類学、民俗学など多彩な分野の研究者によって支えられてきた。その中でも、移民研究は日本がかつてカナダへの移民送出国であった経緯から、国内では地理学や地域学の分野で比較的早期から出移民研究が試みられている。その後、専門分野を超えて移民研究を促進した成果は、その後の出版物を見ても明らかである。歴史学者によるカナダ移民史研究の通史としては、飯野(1997)、佐々木(1999)などがあることは周知の通りであるが、この種の出版は極めて稀である。これまでの通史と異なる本書の特徴は、先に述べたカナダ研究を支える人文・社会科学分野の特異性を活かした手法を用いて、新たな歴史分析を試みた歴史学者による、歴史学研究を志す者のための、新たな教科書とも言えるものになっていることである。その意味でも、本書が出版されたことの意味合いは極めて大きい。

著者は本書を日系カナダ人通史としているが、その内容は単なる通史ではない。確かに、本書を形づくる10章は、内容に応じて前後する部分もあるが概ね時系列に構成されている。しかし、各章は本全体の有機体であって、それぞれが深い関係によって有機的に結ばれているのである。各章は、通史の一翼を担いながらも、著者の地道な研究成果のまとめであると同時に、今後の研究への示唆に富んだ教育書でもある。

本書の前半は、移民史の先行研究に北米のエスニック・スタディを加味し、トランスナショナル・ヒストリーの観点から国際移動の理論に照らして、日系カナダ人史に独自の解釈を加えたものである。後半は、民族誌の理論と手法を用いて、戦後の日系コミュニティの文化・政治活動を通して、世代間の意識の変容と重層性と多民族社会における固有のアイデンティティの獲得とその延長上にある日系コミュニティの再生、そしてそれらを勝ち取る過程及びカナダ多文化主義政策との関係を詳細に検証し、さらには強制移動、収容政策と戦後補償に至るカナダ政治と社会を歴史的且つ法的分析を通して、意

欲的で魅力ある章立てとなっている。

「はじめに」は、本書の流れと分析手法について述べた極めて明快な解説書となっている。ここで特筆すべきは、本書のキーワードとなっている「移動と運動(ムーブメント)」についてである。環太平洋の史的うねりのなかで、人は「移動」し、新たに生活圏を自ら構築するために「行動」した。筆者はこれを両者の意味をもつ「ムーブメント」として捉えている。本書はそのダイナミックな動きのなかで、政治的かつ社会・経済的な抑圧に晒されながらも「生存戦略」で巧みに生き抜き、異質文化と対峙するサバイバルの知恵を身につけていった日本人移民および日系人移民の歴史を生き活きと描き出そうとしている。

第1章では、ヨーロッパ系移民が権力独占形態を築くなかで、出稼ぎ的性質が未だ強かった日本人移民が一方の「移動」ではなく、故郷と移民地とを双方向に移動する「越境移住回路」を有し、「トランスローカルな移民社会」を形成していたとする。特にその傾向を労働者の居住地であり、商業の中心地となったパウエル街、漁業のスティープストン、農業のフレーザーバレーの就業形態の紹介を通して論証している。また、「連鎖移民」もこの回路の存在の証ともなっている。

第2章では、バンクーバー暴動はこれまで捉えられてきたような日本人移民の急増に対して激化した排斥運動が生んだ偶発的な現象ではなく、当時の環太平洋の政治的・経済的環境が国際的な人口移動を急速に発展させ、これに対する北米西海岸に既に存在していた反アジア感情を激化させたことで起きた一連の事件や暴動のひとつとして捉えるべきとしている。また、この事件がその後の移民システムに変化をもたらす史的転換点であったことにも言及している。

第3章は、章の初めに著者が述べているように、グローバル・ヒストリーの視点から日本人移民のアイデンティティが日系人に変容する過程を一方としてではなく、双方向あるいは多方向なものとして捉え、彼らが「戦略的に生活圏を選択」し、「活動する」移民であり、その過程を「多様かつ多層的な体験」と捉える新たな切り口で在カナダ同胞社会の発展を描き直している。この研究の基盤となっているのが、バンクーバー暴動以降、日加間の移民システムの変化による女性移民の増加とその結果による定住家族と生活圏の拡大や子女教育のシフトなど、出稼ぎ的労働者社会から永住への強い志向性の芽生えから「日系」エスニック・コミュニティへの変容を見出している。

しかしながら、筆者はこの期の日本人カナダ移民が同時に日本の帝国領事館との関係を維持するなど、「法的なアイデンティティ」が「重層的」であったことも見逃してはいない。また、オーラルヒストリーなどを駆使した女性の体験から「多角的に」描き出される日系移民生活史への奨励も今後の研究者の意欲を掻き立てるものがある。

第4章は、移民政策や法体系がアメリカと異なるカナダにおけるアジア系排斥運動について論じたものであるが、戦前のカナダ社会への浸透と生活向上への努力も日本人お

よび日系人排斥運動の波は容赦なく押し寄せることになる。著者は白人によるアジア系排斥運動を単なる無知と無理解による人種主義の発露ではなく、「ホワイトカナダを掲げるBC州のヨーロッパ系住民の特権を守る政治的な装置」と位置付け、北米西海岸におけるアジア系移民に対する排斥運動は激化していくなかで、日本人移民はどのようにして生存を確保していったかを投票権剥奪問題、漁業ライセンス削減問題、外国人土地法成立阻止、そしてバンクーバー朝日を取り上げ、マイノリティの「生存戦略」という観点から分析を試みている。これらにかかる法廷闘争や帰還兵の投票権獲得請願、文化的同化による協調戦略、スポーツを通しての資質の誇示は、日系カナダ人がただ「受忍」していたのではなく、人種主義的差別による重圧に対して直接的・間接的に自己防衛本能に基づいて戦略的に対抗であり、カナダ社会を構成する「日系カナダ人」という多民族社会のマイノリティとして生存すべくむしろ積極的な道を選択していたと評価している。

第5章における真珠湾攻撃にはじまる太平洋戦争下での米加両政府による強制移動と収容等に関しては他に紙面を譲るが、戦時措置法の名の下で、移動および財産没収と「過酷な迫害」と分散政策による「主流文化への同化の強要」が日系人に何をもたらしたか、そしてカナダ社会にどのような後遺症を残したかの議論については、特筆しておくべきである。

戦時措置法はそれまでの潜在化していた排日感情が公に顕現化したものであり、結果として日系人コミュニティに崩壊をもたらし、民族固有の意識の否定と「沈黙」を強いたのである。日系人強制移動と収容はカナダ人の人権保障を揺るがす国家的問題であったにもかかわらず、それを可能にした背景に、「BC州の排日的世論に与することが連邦の政治的利益につながるという政治構造的要因」の存在と人種間の緊張の原因となっているマイノリティを「不可視化」することで「国家統合」を実現しようとする政治志向があったとの指摘は重要である。

第6章で語られているように、日系カナダ人が戦中・戦後において連邦および州政府の思惑による財産没収と立ち退きおよび国外追放政策などでコミュニティと生活の糧を失い、過酷な状況からの「再出発」を余儀なくされた。筆者はこの時代をカナダに残された人々の「サバイバル時代」と位置づけ、彼らが如何にして自文化の再生(リバイバル)を成し遂げようとしたかを描き出している。この章は後半部分へのプレリュード的役割を果たしている。第7章から第10章にかけて、著者の研究の成果と魅力は顕著であり、独創的でもある。その意味では、過去の関連出版物とは一面をなしている。

特に第8章の「桜とメイプル」以降の章では、著者が長年の間フィールドワークを兼ね、自らをその時空間に身を置いて地道に観察と調査を行ってきた結果、結実させた論考として意義深い。「パウエル祭り」然り、小規模な日系コミュニティであり、その規模故に早期から世代間のギャップと人種的モザイクを経験し、最終的にNAJCの本部としてリ

ドレス運動の中心的役割を担ったマニトバ州のウィニペグでの「フォークロラマ」での調査然りである。

本章で最も注目すべきは、同化＝「不可視化」を甘受した二世とは異なり、リドレス後のコミュニティ再生の新たな担い手となった日系三世は隣国アメリカでの人権運動と結びつき、国内では新移住者との交流を深めるという「重層性」を持つようになったことである。つまり、日系三世は新たな視点で自文化を見直す「アイデンティティ・シフト」を経験していたのである。この新たなアイデンティティは多文化主義を単なる「与えられたもの」ではなく、「下からの運動」として「ムーブメント」の核となっていくことを示唆している。

第8章の「リドレス運動」では、隣国アメリカでの運動とカナダにおける運動との違いも念頭において、詳細な経緯分析を行っている。その結果として、カナダのリドレスは差別を生み出す社会システムそのものに異議を唱える運動であって、政府による謝罪と補償はその「儀式」にすぎず、あらゆる差別撤廃運動への「出発点」と捉えるべきものであると主張する。

第9章の「戦時措置法の撤廃と緊急事態法案の改正」では、人権保障上の問題として戦時措置法と緊急事態法案を比較・分析している。後者の法案の特異な点は、原案に広く国民の意見を組み入れた改正過程にある。この法案修正に寄与した団体のひとつが全カナダ日系人協会であったことはよく知られている。戦時措置法の撤廃においてその法の「恣意的に政治的利害関係の犠牲」の最たる体験者が日系人であったことを思うと、彼らの意見なしではカナダ人の人権擁護と保障は成り立たなかったと考えるべきであろう。この章の第2節では、このことを踏まえて、「全カナダ日系人協会が法案修正にかかる協会」の積極的な提案と関わりが丁寧に考究されている。日系人の体験とリドレス運動が人種主義と政府による市民権の侵害を否定し、全カナダ人にとって不可欠な基本的人権の擁護・保障へと同国の民主主義発展に重要な役割を果たすまでになっていたのである。この意味でも前章での主張である「出発点」としてのリドレスの存在を裏付けるものである。

第10章におけるリドレスの成功は日系カナダ人をコミュニティの再生へと導いた。その原動力となる新たなアイデンティティの構築は過去の歴史の「掘り起こし」をも意味した。「バンクーバー朝日と日本人越境史の再生」では、近年「バンクーバー朝日」が日加両国で放映され話題になり、忘れ去られようとしていた文化史の一端が蘇ることになった。朝日軍の詳細は他の書籍に譲るとして、重要なのは戦前のバンクーバーに人種間の境界線を超越して活躍した日本人野球チームの存在意義である。本書ではその存在意義が日系カナダ文化と歴史の再生に大きな意味を内包していたことに注目している。彼らの活躍の場となったオープンハイマー公園が、パウエル祭りの会場として日系コミュニティの再生の象徴となったこととは深い関係があるのである。埋もれた資料の発掘と失われ

た資料を補完する聞き取り調査の限界は迫っていると本書が警告を発していることに我々は傾聴すべき時期なのは確かである。

人類学や文化人類学が説くように、人類は移動することによって現在の繁栄を得たとするならば、その繁栄を束縛してきたもののひとつは「移動の自由の剥奪」であるという。もしこれが正しいとすれば、人類が繁栄のために必要かつ自由の根幹である「移動する権利」を物理的・精神的に束縛することについて我々は再度考えなければならなくなる。

今年3月にドイツのメルケル首相が、新型コロナウイルスの対策を国民向け演説で、日常生活や社会生活の制限を民主主義にとっての「重大な(政府)介入」と位置づけ、国境封鎖について「こうした制約は渡航や移動の自由が苦難の末勝ち取られた権利である…絶対的に必要性がなければ正当化し得ないもの」であり、「民主主義においては、決して安易に決めてはならず、決めるのであればあくまでも一時的なものにとどめるべき」⁽¹⁾として民主主義社会において我々のあるべき姿を示唆している。

「時代が違う」と抛棄することは容易い。しかし、こうした自由の束縛は人類が繰り返して行ってきた愚行でもある。日本人カナダ移民や日系カナダ人が経験した市民に対する政治的・社会的移動の制限はこの「移動の自由」を束縛することであり、社会的正義ではあり得ない。その意味でも強制移動・財産没収を課された市民や民族の歴史は「時代性の産物」として片付けることはできないのである。グローバル社会で生存しようとしている今日の我々の社会にも埋もれた格差や差別が存在していることを思えば、「ポストコロナの時代」を見据えて、あらためてこの問題を問い直すべきであろう。そこに専門分野の壁を越えて本書を手にする意義は大きいと感じるのである。

(しもむら ゆうき 神戸国際大学名誉教授)

(1) 新型コロナウイルス感染症対策に関するメルケル首相のテレビ演説、2020年3月18日、ドイツ連邦共和国大使館・総領事館サイト <japan.diplo.de>

The Annual Review of Canadian Studies
Le revue annuelle d'études canadiennes
KANADA KENKYU NENPO

2020

No. 40

Articles

- Okinawan Migration Processes in the Canadian Prairies
in the Early 20th Century..... Hironao Hanaki
The Role and Reality of the Orillia Asylum for Idiots
in the Late 19th Century Ontario Yuri Geshi

Book Reviews

- Akira Tabayashi, ed., *Kanada-ni-okeru Toshi—Noson Kyosei Sisutemu (Urban-rural Symbiotic Systems in Canada: The commodification of rural space and regional promotion)* (Agriculture and Forestry Statistics Publishing Inc.,2020)
.....Naoharu Fujita
Ruth Abbey, *Charles Taylor (Philosophy Now)* (London: Acumen, 2000)
trans. by Yoshiko Umekawa (The University of Nagoya Press, 2019)
..... Takashi Niwa
Mizuho Hasegawa, *Senju-Shosu-Minzoku no Gengo-hoji to Kyoiku (Language Retention and Education of Indigenous and Minority Peoples)*
(Akashi Shoten, 2020)Nobuhiro Kishigami
Masumi Izumi, *Nikkei Kanada-jin no Ido to Undo — Sirare-zaru Nihonjin no Ekkyo-seikatsu-shi (Japanese Canadian Movement)* (Takanashi Shobou, 2020)
..... Yuki Shimomura
Takamichi Mito, Taro Oishi, and Emi Ooka eds., *Sogo Kenkyu Kanada (Understanding Canada: An Interdisciplinary Approach)*
(Kwansei Gakuin University Press, 2020)..... Toshihiro Tanaka

Recent Publications on Canadian Studies in Japan

The Japanese Association for Canadian Studies
L'Association japonaise d'études canadiennes